

令和6年度福岡市人権尊重週間 第53回人権を尊重する市民の集い（城南区）
令和6年12月5日（木）14:00～15:40 福岡市科学館 6F サイエンスホール

- ・演題 「こうのとりのゆりかご」から始まる第2の人生
- ・講師 ふるさと元気子ども食堂代表・(一社)子ども大学くまもと理事長
宮津 航一 (みやつ こういち) さん
小規模住居型児童養育事業所 宮津ファミリーホーム管理者・(一社)ふるさと元気
村代表理事
宮津 美光 (みやつ よしみつ) さん

今年の市民の集いは、「こうのとりのゆりかご
(以下「ゆりかご」)」に3歳で預けられ、現在は、
熊本県立大学で学生として学びながら、「ふるさと
元気子ども食堂 (以下「子ども食堂」)」の代表や
「子ども大学くまもと (以下「子ども大学」)」の理
事長を務める宮津航一さんと熊本県内の「ファミリ
ーホーム」管理者で宮津航一さんの養父である
宮津美光さんを講師にお迎えしご講演いただきました。



宮津航一様 と 宮津美光様

宮津美光さんは、これまで、非行少年など地域の青少年への自立支援のため、「遊び」と「地域活動」を合わせたまちづくり団体を立ち上げて、自分自身や家族、友達を大切にする大人になってほしいとの願いをもって子ども達に関わってきたこと。

この活動を通じて『どの子も同じ地域で見守り育てなければならない小さな命であり、大きなエネルギーを持っている。子ども達を地域で見守り地域で子育てすることは大切であると感じた』とお話になりました。

続いて、宮津航一さんは、冒頭、これまでの経歴を紹介され、3歳で「ゆりかご」に預けられた時は、名前も生年月日もわからず、「ゆりかご」の絵が描かれた扉の風景のみが記憶に残っていると話しされました。

「ゆりかご」には、開設以降179人の子ども達が預けられ、乳児院、児童養護施設、里親など、預けられた後の環境は様々であると説明されました。

また、宮津家の子どもとして愛情を注がれ育った様子を写真を用いながらユーモアたっぷりに話しされました。

自身の生い立ちについては、0歳～3歳までの3年間はほとんど記憶がなく、過去の自分を知ること、生い立ちを少しずつピースに落とし込んでいきたい。

名前、生年月日、血液型も分からず戸籍もないため、熊本市長が名前を付けてくれた

こと。生後5カ月で実母が交通事故で亡くなっていたが、写真で実母の顔を見ることができたことは、悲しみよりも生い立ちの一部が分かったことが嬉しかったことなど、両親が生い立ちが大切な人生の1ピースだと伝え続けてくれたと感謝の気持ちを伝えられました。



一方で、「ゆりかご」には、自分の生い立ちを知らない子ども達が8割いる。子ども達の生い立ちにつながる情報を少しでも残すことが大切であり、今後の課題であるとお話しされました。

また、実の親がいないという理由で偏見を受けた際に、母が守り続けてくれたというエピソードでは、父美光さんが言い続けた「家族とは、血が繋がっていることだけではなく最後まで味方であることが家族である」との言葉が実感できた。

家族のあり方は、人によっていろいろな価値観がある。家族を見つめ直す機会にしてほしいとお話しされました。

次に自分の生い立ちがきっかけになった活動を2つ紹介されました。

「子ども食堂」については、全国に9,131カ所、熊本に170、福岡に342カ所あるものの、身近な存在になっていない現状であると説明されました。

子ども食堂を始めたきっかけは、両親の存在と両親が取り組むボランティア活動が身近にあったこと。コロナ過で地域の人との繋がりが薄れてきたこと。さらに福岡県で男児の餓死事件に衝撃を受けたことであり、高校生で子ども食堂を開設した。

開設の目的は、「居場所づくり」と「人とのつながりづくり」である。貧困のイメージがあるが、だれでも利用できるよう間口を広げ、その中で支援が必要なことを見つけしていくことが大切であり「お腹を満たし、心を満たす居場所」を提供したいとお話しされました。

さらに、一つの繋がりが生まれて、相談できたり、ちょっと頼れる人がいたり安心して居場所づくりにつながる思いで地域の皆さんに協力いただきながら活動していると説明されました。

また、食堂の運営には、地域の存在が大きい、いじめや不登校など子どもに関わる問題は、親の問題と言われるが最終的には、地域社会の問題。地域で支える居場所をつくることが大切である。

当事者の一人として、子ども達には温かい家庭で育ててほしい、自分に対してしっかりと愛情を注いでくれる大人の中で育っていくことが大切と、熱い思いを語られました。

続いて、「子ども大学」については、「ゆりかご」を運営する熊本市慈恵病院で「ゆりかご」開設時の看護部長だった田尻由紀子さんと宮津航一さんが、心を満たされていない子どもや保護者が多い中、子ども達が、いろいろな人とつながり、刺激を学ぶ機会を

つくってあげたい。子ども達の心を満たす機会をつくりたい思いで設立したと説明されました。

子ども大学は、子どもが学生となって大学の教室で、様々な専門家の授業を受けるもので、ドイツが発祥であるとのこと。東京都や埼玉県などで行われているが、熊本独自の取り組みとして「いのち学」を設け、自分のいのち、他の人のいのちを大切にすることを伝えていく。これは、いのちを繋いだ人、いのちを繋いでもらった人、それぞれの当事者として伝えることに意義があるとお話しされました。



生い立ちを公表した背景については、「ゆりかご」に預けられた179人は全国バラバラでどこにいるか分からない。生い立ちを公表することで、一人ではないということ、同じ境遇を持ったものが前を向いて歩いている姿を、その子たちに当事者としてメッセージ届けたいという思いで公表した。

そして、「ゆりかご」に預けられて終わりではなく、その後も、子どもや預けた親も人生が続いている。預けられた子ども達の幸せの実現に向けて、社会全体で関わっていくきっかけになればとの願いを伝えられました。

最後に、自分の好きな言葉は、渡辺和子さんの本「置かれた場所で咲きなさい」を紹介され、自分は何故ここに居るのか、自分の使命は何かを考え、自分の花を咲かせ、周りにいる人たちのために、周りの子ども達が花を咲かせることができる存在になってください、とエールを送られ、会場の盛大な拍手とともに講演は終了しました。

参加者のアンケートでは、

- ・『いろんな環境でこの世に生を受けた子どもたちに愛情と光を与えてくださるお二人の話に感銘しました。』
- ・『“家族とは最後まで味方”という考えに共感しました。人は皆、親を選べない。今を幸せに生きてるとおっしゃる宮津航一さん、これからもしっかりと発信していって下さい。心から応援しています。』
- ・『航一さんが生いたちを公表され、社会の中の子どもたちのことを考え前を向いて活動されていることに深い感銘を受けました。』
- ・『里親、血のつながりのない子どもを育てる事はすごい事です。宮津さん親子すばらしいです。いい話を聞かせて頂きありがとうございました。』

等のご感想をいただきました。

(文責：生涯学習推進課)